らば其の譏りは本人の一身に止まらずして學生全体の榮譽に關し、取りも直さず、學育の故郷を汚がすものなれば同學の義務として相互に之を責めざるを得ず、抑も老生が學生に向て求むる所は多くして酷なるが如くなれども任ずること重ければ責も亦大ならざるを得ず、老生を始めとして教員役員の人々が學生を視ること死物の如くして其の心身を束縛して自由を許さず之を鞭撻して進退左右せしめんとすれば必ずしも其の心事の如何を問はず唯表面の塾法に從て温順なれば以て滿足すべし學生も亦此の熟を視て仮りの宿と認めば却て安氣なるべしと雖も、左りとは貴重なる日月を費して學塾に居りながら卑屈の習慣を養ふに異ならず學ぶ者の本意に背くものと云ふべし、故に老生は諸君に向て在學中、塾法に從ふは勿論啻に之に從ふのみならず更に一歩を進めて塾の一部分は銘々の私有なり之を集むれば共有なりと覺悟して苟も自治の旨を忘するゝなからんことを勸告する者なり、諸君を責むること酷に似たるは畢竟之れを重んずるが故なり吳〳〵も自ら輕んじて身を汚し隨て學育の故郷を辱かしむる勿れ（福澤諭吉）

○首唱者開會の演說（出征兵士送別會に於て）

義勇奉公の精神に富める出征兵士諸君の爲に聊か送別の宴を開きまするる所が、圖らずも熱心なる有志諸君の同情を得て近來稀れなる

盛況を呈せしは、本會の光榮此上なく、我々首唱者は熱き同情を寄せられたる來會者諸君に對して偏に感謝せんければなりません、却て說諸君よ、諸君と我々と軍國の際なるにも拘らず其の家業を稼いで居らるゝ所以のものは誰のお蔭でせう、耳には霰と降り來る彈丸の響も聞かず目には紅葉染めなす血河屍山の慘狀も見ず、寢るに夜具あり、坐るに壘あり、憩ふに家あり、着るに着物あり、三度の食事も腹便々と食べて以て光陰を送る所以のものは抑も誰のお蔭でせう（ハテナ……）我々の喋々を待たず之ぞ兵士のお蔭です兵士諸君の力と言はんければなりません（同感〳〵）先づ我心を得たり）若し其れ一且兵の力が國を去りたりと仮定したらんには如何でせう、兵士諸君の力が

國家と離れたとしたらんには如何でせう、云ふまでもなく野蠻極まる露國の爲に蹂躙られ、踏倒され、家でも財產でも夜具でも衣類でも皆剝ぎ取られたる其上に猶ほ叩かれたり、縛られたり、强姦せられたり可愛い女房や子と一處に居ることも出來んでちりぐばらぐと蜘蛛の子の散るが如く、嘆かはしく、痛ましく、悲しき慘狀を目に見る事は申す迄もなく隨て諸君と一處に今日此席に會合するが如きことも出來ず亦家業を安樂に稼ぐ事も出來んのです（然り〳〵、其說最も然り）果して然らば兵士は實に國家の柱石で有て國民の擁護者と謂はんければならません（然り）國民の財產生命を保護する者と謂はんければなりません（然り〳〵）國旗に光を添へて國利民福を增進する者

と謂はんければなりません(ヒヤ〳〵大ヒヤ〳〵〳〵)デすから我々も最も兵士を愛せんければなりません兵士諸君を愛せんければなりません(同感)今後益々兵士諸君を愛すると同時に敬で來會者諸君の一方ならざる御厚情を感謝致します(ヒヤ〳〵大ヒヤ〳〵〳〵)

資料 御多忙の時節柄にも拘らず有志諸君が萬障擲て御來會下すッたことは本會無上の光榮で有て首唱者一同の感謝する所でありますが却て諸君……○本日は之れ如何なる會でありませう他なし、出征兵士諸君が舊て滿洲戰地へ行かんとして其れを送らん爲に開きたる送別の會でありませんか我々は出征兵士諸君に向て感謝せんければなりません○本日開會するに當て有志諸君が舊て御臨席下すッた御厚意は首唱者一同の喜悅する所であると同時に又兵士諸君が切角御光來下すッても何の御馳走のなき事を深く謝せんければなりません○雨は蕭々として一天掻き曇りたるもお厭ひなく舊て御來會下すッた其の山海も啻ならざる御厚意を感謝致します○諸君出征後は眼中決して一物を措かず、唯だ措くものは國家の二字を以てせられんことを、國家の二字の爲には矢石も畏れず彈丸も憚らず文明の敵、正義の敵、公道の敵、併て遼東還附の大敵たる露軍を蹴倒し蹴殺し踏倒し以て二十世紀の劈頭に花々しき功名を願はされんことを○望みを將來に屬して以て兵士諸君の名譽と健康とを祈ると同時に來會者諸君の盛意盛情を感謝致します

○出征兵士送別會の演說

日本と露國とは到底兩立することの出來んものと我々は信じます、兩立せんとしたならば晩かれ早かれ到底戰爭は免れんものであります

す（然り〳〵）戰爭するならば今が最も適切なる時期であります、ソは申す迄もなく敵の軍備未だ十分ならざるを以てゞす、敵の羽翼が未だ十分東亞に伸びざるを以てゞす（お說の通り）若しも敵の羽翼が十分に伸び、敵の軍備が十分整ふたる曉には滿洲は彼れに奪はれ朝鮮は彼れの手に取られ我國は如何にアセリ如何に力味で見た所が最早仕方の無いことは我々の喋々を待んで賢明なる兵士諸君の知らるゝ所でせう（然り〳〵）其れ然り、故に我國は今回飽まで露國に打勝んければなりません、露國の羽翼を殺んければなりません、露國の東方經略を根底より顚覆して復た起つ能はざる樣にせんければなりません（其說最も然り）實に今回の戰爭は天下分け目の戰爭にて二千五百年來未

だ曾て有らざる大戰爭であります、故に我れ露國を打斃さゞれば露國我を打斃すことは鏡に懸けて見る如くであります（露助打て〳〵打斃せ〳〵）嗚呼、光輝ある二千五百年來の歷史を瀆すも此秋にあります亦二千五百年來の歷史へ層一層の色彩を輝かするも此秋にあります露國に打敗けて其の屬國とならんか我々の堪へ忍びざる所であります、露國に打敗けて其の奴隸と爲らんか祖先に對して何の面目かある（然り〳〵、ナニ糞此の露助め、彼れに負けるものか）如かず露國を打斃して以て積る怨みを打晴らすと同時に豐榮昇る日章旗を烏拉の山東へ飜へさんには……之れ山田隆一君等の最も期する所で有て國民の等く願ふ所であります（ソーとも〳〵）願くは山田君よ、親愛なる隆一君よ

出征萬里彼の地に到らば靴で蹴るべし烏拉山、刀で斬るべしコザック兵以て赫々たる威勳を樹て芳名を千載に傳ふると同時に我が鄕里の名をも社會の表に揚げられんことを敬で君が勇ましき首途を送り併せて健康と名譽とを祈る(ヒヤ〳〵大ヒヤ〳〵〳〵)

資料 名譽の裡には苦心慘憺の情ありとの諺の如く諸君今後の心情察するに餘りあり○乍レ併、請ふ畏るゝ勿れ志ある者は事竟に成る、志ありて天下得て成らざるもの有らんやです○本日は之れ山田君が蹴起一番劔を提けて遠征萬里の途に上らんとして其れを送らんが爲め聯か祖道の小宴を開きたるのであります○私は感じます、山田君に就て感じます、何んとなれば山田君は出發の際に臨みて一滴の涙をも注ふさざるのみならず却て無上の名譽として意氣揚々之れより露國を膺ち難さんと致しますから○帝國の獨立是より益々固かるべし帝國の富强是より益々盛大なるべし帝國の武勳是より益々輝くべきのみでなく隨て諸君の名譽も是より益々光彩を發して天下公衆に榮望せらるゝこと決して今日の比の如きでないと余は確信して疑はんのであります

○同　首唱者開會の演說(同其二)

雨蕭々として一天搔き曇りたるにも拘らず遠近の諸君奮て御來會下すつたのは實に本會の光榮で有て我々首唱者の篤く感謝する所であります、偖、目出度市川樣の首途に向て我輩が一言せんも敢て僭越ではありますまい、如何に不肖の我輩と雖も亦國民であるを以てなり、國民の爲に行くべき市川樣の御精神こそ天晴感服です(感服〳〵)大

にしては國家の爲め小にしては我々國民の爲め敵の矢彈を的に受け貴重の生命を陣頭へ棄てんとする之れ市川樣の本領で有て日本魂實に爰に存す（ヒヤ〳〵大ヒヤ〳〵）嗚呼誰か生命を惜まざる者なからん乍併ら市川樣は寧ろ一身の生命を棄てゝも我々國民、並に、我が國家を泰山の安きに置んものと古の忠臣義士にも優りたる御勇壯、御精神で今回行くのであります（然り〳〵〳〵）ですから我々國民たる者は充分熱心に之が首途を送らんければなりません（同感）滿腔の熱誠を棒げて之が名譽と健康とを祈らんければなりません（同感〳〵大同感）請ふ市川樣よ、時正に午熱天を燒て金石爲めに鑠けんとする時候なれば努めて國家の爲めに珍重御自愛せられんことを（拍手喝采滿場を動かす）

本書の熟語

雨蕭々（アメガフリテサビシイ）　滿腔（ハラ、イッパイ）　熱誠（ネッシン）　午（ヒルノアツサ）　熱（ヒヤ）
珍重（タイセツニスル）　陣頭（イクサバ）　精神（コヽロ）　御自愛（タイセツニスル）
本領（本心○精神○モチマヘ）　感謝（オンレイ）　贅辯（ヨケイナオシヤベリ）　腹便々（ハラガ、ブタ〳〵ホテイサンノ、ヨーニフクレテチル）
貴重（タツト）　イ　同感（私モソー思フ）　感服（カンシン）　然り〳〵（ソーダ〳〵）
慘狀（イタマシキアリサマ）　保護（タヽチマモル）　喋々（ベチヤ〳〵シヤベル）　ノー〳〵（ソーデナイ〳〵）
萬障（多クノサシツカヘ）　擁護（マモル）　喃々（イロ〳〵云フ）　ヒヤ〳〵（ソーダ〳〵）
請ふ（ネゴー）　切望（ヒタスラノゾム）　生命（イノチ）　血河屍山（イクサバ）
霖雨（ナガアメ）　泥濘（ドロカユ）　僭越（デスギル○身分ヨリコエテル）　立錐の地（スコシノ地○キリチ立テルホドノ地）

○戰死者へ對する演說

私は此の會戦の場に臨みて悲愴急ち胸に満ちて言はんとする所を知らんのです、回顧するに日露端なく干戈を相交ふるに至るや藤村様は意氣激昂、老親の在るをも顧みず一家の生計の如何をも顧みず唯だ〳〵忠義の一徹に八重の沙路を蹴立てつゝ敵艦所在地へと突進したのであります、爾來旅順の海戰に參加して雨と霰と降り來る敵の十字火の下に奮戰致されましたり或は狂瀾の上怒濤の間を乘切て港口封鎖の任務に就れたり或は敵塞の下に強襲偵察をお遂げなされたり或はバルチック艦隊撃滅に御加りなされたり一として九死の間を出入して悽絶愴絶の感を吾人に與へざるものはありません、吾人は此の名譽ある戰捷兵、此の光輝ある藤村様と早晩手を握て其の勇戰

の偉動を激賞し其の快談壯語を耳にして共に帝國の光榮を祝せんものと今日の今日まで相待て居たのです、今日只今まで遙か西天を望んで相待て居た所が天何ぞ無情なるや余をして歔欷流涕、涙巾を沾ふすを覺へざるに至らしめました、嗚呼私の望みは水泡に歸しました私の望みは畫餅となりました眞に空頼みでした之を如何ぞ失望せずに居られませうや之を如何ぞ泣かずに居られませうや、好し私の思ひは空頼みと成り私の望みは畫餅に歸し水泡に歸し去ても、私は熱き涙を忍んで可と致しますが乍去ら國家今日の有様を如何にしませう國家安危の分るゝ今日藤村様の如き愛國の御精神に富める者、義勇奉公の念の熾なる者、忠義骨髄を塡むる軍人の儀表たる者が我

が軍人社會の名簿より引拔かれ我が軍人社會より復た其人を見るを得ずとしたならば如何でせう、唯に私の歔欷流涕する斗りでなく滿場の會葬者も恐らくは余と其感を同ふするのでありませう（此時會場慘として悲哀の涙に沈まざるなし）嗚呼、年取たる御兩親のあるをも顧みず生計の如何をも顧みず彈丸雨飛の間、砲火號發の下に一死以て國家に報じたる藤村樣の如き者は天晴忠臣と謂はんければなりません後世子孫の模範である本分を盡したる者と謂はんければなりません、然れば藤村樣其人に於ては亦遺憾はないのでせう、殘念はムらぬでせうなれど我々は斯る忠義の者が生存へて怨み累なる露國を打斃し早く宵戰の御詔勅を貫徹し陛下の御軫

念を安しく奉らざるを遺憾として一に天道の無情を嘶つと同時に國家の爲に痛く惜んで已んのであります

資料

六月炎天火の如き程を奔走し三冬風荒れて白雪の野に奮戰せしも敢て風せず却て以て快と爲して日本男子の本領を發揮せられしも今や則ち見ゆることは出來ません○一念茲に至りまする時は感涙袖に絞らざらんとすれと得んのです○年去ら人誰か死なからん空しく生きて草木禽獸と居らんよりは寧ろ芳名を千載に傳へて後世子孫の鑑となる方が優りて居ります君は能く此の本を實行せられた者と謂はんければなりません

軍人學生

雄辯演說法 附修辭資料 終

明治四十一年四月十三日印刷
明治四十一年五月二日發行

定價金貳拾錢

東京市淺草區下平右衛門町九番地
編輯兼發行者　岡村庄兵衛
東京市京橋區本八丁堀二丁目十五番地
印刷者　池田勝四郎
東京市京橋區本八丁堀二丁目十五番地
印刷所　立教社
東京市淺草區下平右衛門町九番地
發行所　岡村書店
東京市神田區表神保町二番地
發行所　福岡書店

不許復製

258
514

東京
二書房
發行